観光フォーラム

変わりゆく白川郷
―住民と観光客の目から―

Change in the Tourism Landscape of Shirakawago World Heritage Site

黒田 貴也[1]、森 華乃子[1]、大西 桃香[1]、力本 昂龍[1]、野田 優[1]、石田 理沙[1]、井上 昂大[1]、大前 陶子[1]、笠原 沙貴[1]、川西 将史[1]、栗本 千聖[1]、古田島 和史[1]、鈴木 歩生[1]、中本 安美[1]、西村 優花[1]、チャクラバルティー アビック[2]
Takaya Kuroda, Kanoko Mori, Momoka Onishi, Koryu Rikimoto, Yu Noda, Risa Ishida, Takahiro Inoue, Toko Omae, Saki Kasahara, Masashi Kawanishi, Chisato Kurimoto, Kazufumi Kotajima, Aoi Suzuki, Ami Nakamoto, Yuka Nishimura, Abhik Chakraborty
1　和歌山大学観光学部（14 期生）
2　和歌山大学観光学部准教授

キーワード：白川郷、世界文化遺産、景観、俗化、「結」
Key Words：Shirakawa-go, World Cultural Heritage, Landscape, Trivialization, ‘Yui’

Ⅰ．はじめに

本稿では、和歌山大学観光学部のチャクラバルティー･アビック准教授が担当する演習型授業「Activity for Project」の一環として岐阜県の世界文化遺産白川郷で実施した現地調査の体験を踏まえ、白川郷の観光の現状や課題を整理し、持続可能な観光の可能性について記述する。2021 年 11 月に行った 2 回の現地調査に先立ち、事前学習として 2021 年 4 月から 10 月にかけての約半年間、文献の輪読やブレインストーミングを行った。現地調査では、合掌造り家屋に宿泊し住民や観光者への聞き取り調査を行った。

授業および研修の主たる目的は、世界的にみても有数である、実際に人が生活する世界文化遺産の白川郷の景観的、社会文化的特徴を理解し、ツーリズムの位置付けや世界遺産で行われるツーリズムの相応しい姿を考えることであった。国連世界観光機関（UNWTO）は、持続可能な観光を「訪問客、産業、環境、受け入れ地域の需要に適合しつつ、現在と未来の環境、社会文化、経済への影響に十分配慮した観光」と定義している（観光庁・UNWTO 駐日事務所 2020）。また「ユネスコ世界遺産」は、国際的価値のある景観や資源を保全しながら活かし、持続可能なツーリズムを実施する場でもあると考えられている（中村 2019）。しかし、世界遺産に登録された地域には多くの課題も残され、素通り観光客が増えても地域に経済的利益が還元されないことも指摘された（ICOMOS 2001-2002）。そこで、1995 年に世界文化遺産に登録された白川郷では、住民はどのような取り組みを行い、観光と文化遺産の保全の両立を図ろうとしているかについて検証を行うことが必要だと考えられる。

Ⅱ．白川郷の変化と観光の概要

白川郷は、現在の岐阜県白川村と高山市荘川町とを合わせた範囲のことを指しているとされ、岐阜県内を流れる庄川流域の河岸段丘および扇状地に位置する（合田・有本 2004）。冷温帯に属しているが、冬は日本海側から大量の湿った空気が流れ込むため、日本有数の豪雪地帯となっている（合田・有本 2004）。2016 年の調査によると人口は 1668 人である（白川村 n.d.a.）。白川郷は、厳しい気候の中で長年にわたり人と自然が共存しつつ住み続けてきた歴史によって形成されてきた。伝統的な合掌造り家屋が立ち並び、中心には集落、その周囲に田畑、さらにその周囲は森林という、いわゆるドーナツ型の農村景観が広がっている点が特徴的である。また、家屋の周囲に防風林として植樹された松の木や、その周囲の田畑などから、白川郷が伝統的に農村地域として発展してきたことが分かる（合田・有本 2004）。

1995 年には、白川村の荻町地区と五箇山の合掌造り景観は「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として世界文化遺産へ登録された（才津 2006）。ただし、白川村では重要な伝統的景観である合掌造り家屋を守る運動が登録以前から行われ、その詳細は合田・有本（2004）から分かる。江戸時代から当該地域の伝統文化を象徴してきた合掌造り家屋は、戦後の高度経済成長期におけるダム建設、土地利用変化から

大きな危機を迎えることになり、結果的に一部の合掌造り家屋や萱場はダム湖に水没、合掌屋根の維持困難、一部の集落から集団離村が起きた。このような状況を受け、住民らは、1971 年の「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」の結成を契機とし、住民憲章において「売らない」「貸さない」「こわさない」の三原則を定めてその保全に努めた。

その後、1980 年代まで陸の孤島であった白川村は周辺の交通網の整備を受けてアクセスが格段に向上し、1990 年代及び世界遺産登録前後において観光客数の急激な増大を経験した。特に世界遺産登録後は、住民のプライバシーの損失、ゴミの発生や仮設トイレの設置による景観の悪化など、観光公害も報告された。また観光客の多くはたった 1-2 時間のみ滞在する素通り観光の目的地として白川郷を訪れており、宿泊者の割合が低いという特徴も明らかであった。

世界文化遺産登録の背景には、白川郷の特徴である「特徴的な文化的景観」と、長年にわたってそのような文化景観の維持の可能にした「結」の存在が評価された（内海・黒田 2009）。白川村の面積は 356.6 平方キロあり、白山（2702 m）に代表される急峻な山々と豊かな広葉樹林に囲まれており（白川村 n.d.b.）、その特殊な気象や地形条件に対応した知識として合掌造りが生まれた。このような白川郷の風景は図1から確認できる。

図1. 山に囲まれた荻町の風景（筆者撮影）

合掌造りとは、茅葺き屋根が手の平を合わせたように山型に組み合わせて建築された建物である。この特徴的な屋根の形状は、屋根に積もった雪を自然と降ろすためであり、豪雪地帯の環境への適応策として生み出された。江戸時代には、屋根裏にできた広い空間を利用して蚕の飼育を行っていた。また、林業などの森林利用も盛んに行われていた。合掌家屋の形は図 2 にて確認できる。

また、「結」とは相互扶助の精神を示す言葉であり、現在では伝統的な屋根の吹き替え方式を表す際に用いられる。白川郷にこの「結」の精神が存在する理由は、気候条件が厳しく、日常生活や行事での助け合いが必要だったからである。合掌造り家屋の屋根は、長年この「結」の精神を持った住民たちによって吹き替えられ、維持されてきた。

図 2. 合掌家屋（筆者撮影）

上述した通り、かつて陸の孤島とも呼ばれた白川郷は世界遺産への登録を皮切りに日本有数の観光地となり、訪れる観光客は大幅に増加した。白川村の統計によれば、2019 年度、白川村には 2,151,284 人もの観光客が訪れた（白川村 n.d.c.）。しかし、そのほとんどは素通り観光客であるため、観光や文化遺産の持続可能性に繋がっていないと考えられる。以上の点を踏まえ、我々は白川郷において住民や観光客を対象に聞き取り調査を行い、観光や案内施設などを見学し、持続可能な観光の課題について考えた。ただ、訪問当時においては、新型コロナウイルス感染症の影響により、実際に村内を観光している観光客は少なかった。

Ⅲ．調査日程、調査内容

白川郷での現地調査は、2021 年 11 月 13 日から 14 日と同年 11 月 27 日から 28 日の 2 回行った。調査内容は以下のとおりである。現地調査では、国指定重要文化財の和田家と妙善寺、村内最大級の合掌造り家屋と言われる長瀬家、野外博物館である白川合掌造り民家園などを訪れ、宿泊した合掌家屋の持ち主や展示施設・土産物屋の経営者に聞き取りを行ったほか、一部の観光客へのインタビューも実施した。以下、現地調査から見えたことや学んだことを記述する。

Ⅳ．観光地として白川郷の特徴

1．景観の特徴

図 3 から見えるように、白川村荻町（通称白川郷）は、一本の比較的に広い道路の両側に多くの合掌造り家屋が並ぶ景観である。家屋の周りに松の木があり、その周りに田んぼが見られる。防風林としての松の木、農作業をして生活していたことが分かる田畑など、昔の白川郷の人々の暮らしを見ることができる。合掌造りとは、茅葺の屋根が特徴的で、手の平を合わせたように山形に組み合わせて建築されている。合掌造りが日本の一般的な民家と大きく違うところは、屋根裏を積極的に作業場として利用しているところである。妻の開口部で風と光を取り込むことで蚕の飼育に適した環境を形成していたという。屋根裏の大空間を有効活用するため小屋内を 2-4 層に分け、蚕の飼育場として使用していた。

図 3. 合掌屋根の内側（筆者撮影）

村の経済は戦後従来の農業中心から大きく変化し、建設業や 2000 年ごろから、「サービス業」や「卸・小売り」における産業別就業人口がかなり増加したことが報告されている（合田・有本 2004）。実際に訪れてみると、カフェやお土産屋、建設中のプリン専門店などがあり、観光客をより多く呼び寄せ、充実した観光を行ってもらうための施設がみられた。また、屋外にごみ箱が設置されていなかった。これは、ごみ箱を設置したことですぐにごみがいっぱいになり、あふれかえってしまったことがあったためである。また、合掌造りは火に弱いため、延焼を防ぐための放水銃は普段は図 4 写真にあるように合掌造り型の箱に隠されている。これらの取り組みから町の風景や世界遺産としての環境の維持には特に気を使っているということが分かる。

図 4. 放水銃（写真右側の建造物）（筆者撮影）

2．合掌造り家屋

上述した通り、合掌造りは街の大通りよりは、路地に入って少し進んだところに多くある傾向がある。これらの家屋にはたくさんの工夫が凝らされている。その例としては屋根裏にある「ネソ」の結び方や家の壁の傾きである。ネソは合掌造りの柱を固定するために使用される。ネソは左右交互に斜めに結ばれているのが分かる。これはあらゆる方向の衝撃から耐えさせるためである。一方向にのみ結んでいると、一定以上の方向から力がかかるとネソが緩んだり、最悪の場合、家が崩れたりする恐れがある。そうならないために交互に結ぶという。このような屋根の形は図 5 から確認できる。

図 5. 合掌屋根の内側（筆者撮影）

また、合掌造りの家の壁は少し外側に傾いている。これは人で表すとわかりやすくなる。例えば、風があるとき人は抵抗するために風の進行方向と逆に体を傾ける。それと同様に、家が風を受けても耐えられるように家の壁が傾けられている。

Ⅴ．調査から見えたこと

1．コロナ禍の白川郷

2019 年には年間 215 万人が訪れていた白川郷だが、新型コロナウイルスの影響により 2020 年の来訪者は 70 万人に落ち込んだ（中日新聞 2021）。また、訪日外国人観光客数も渡航制限によって大幅に減少していると思われる。白川郷に限らず多くの観光地が苦境に立たされているなか、白川郷においてどのような影響が出ているのかを調査した。

11 月の訪問時には全国的にも感染者数が減少し、人々の往来にも再開の兆しが見られた。そのような中で白川郷を訪問し、滞在時の状況を踏まえるとコロナ禍における白川郷の観光には悪い影響だけではなく良い側面も見られた。観光公害の影響が叫ばれた以前の状況とは異なり、訪れる人々が観光施設をゆっくり見て回れたり趣のある写真が撮りやすくなっていたりとメリットも多いように感じた。また、現状について住民はどう考えているかを聞いたところ、調査前に想像していたより今の状況をポジティブに捉えている方が多かった。住民から、「苦しい」「今は耐えるしかない」という回答もあれば、「一人一人に丁寧に接客できる」「ゆっくりしていただける」「（来訪者と）話す機会が増えた」という意見もあった。

2．住民・地域ステークホルダーへの聞き取り調査より

白川郷の住民を対象に聞き取り調査を実施した。宿泊施設 3 箇所の経営者に詳しい聞き取りを実施したほか、商店の経営者や合掌造り民家園の担当者にも取材を行った。

世界遺産登録の影響については、合掌家屋の保存運動がかなり前から行われていたこともあり、登録によってすぐに大きな意識の変化が起こることはなかった。ただ、世界遺産に登録されたことによって、徐々に観光客（特に外国人観光客）

の数が増え、常に観光客がいる状態になったことが大きな変化として感じられたという。また、住民らの多くは自らの暮らす地域が観光地であることを割り切ったうえで、「観光と共に生活している」と述べた。

次に、世界遺産への登録後に白川郷の住人が感じた良かった点と改善すべきと感じた点について尋ねた。以下、回答を(i)良かった点と (ii) 改善すべき点の2つに分けて記述する。

(i) 良かった点

世界遺産に登録されたことで白川郷の認知度が上がり、その結果観光による収益が増加した。結果、観光が地場産業を振興させて雇用を促進し、住人の生活を支えるようになった。つまり、世界遺産への登録が経済的な側面で良い影響をもたらしたことが分かった。

また、交通整備が進んだことで、通学や買い物が便利になったと語った。学生は高校生になると白川郷を出て一人暮らしをするのが当たり前であったが、交通整備が進むことで通学が可能になった。高速道路の開通などの交通政策は景観の変化や自然保護の観点からマイナスの影響が多いと想定していたが、交通整備が住民の生活がプラスの影響を与えていることが分かった。さらには、認知度が大きく向上したことや若者の移住者が増えたことも良かった点として捉えられた。

(ii) 改善すべき点

世界遺産に登録されたことで観光客が増え、民家の中に無許可で侵入するといったプライバシーの問題が発生するようになったという。そのほかにも観光客が利用するトイレの設置やゴミのポイ捨てといった問題が発生するようになった。また、外国人観光客とのコミュニケーションに苦労していると語った。さらには、観光客の増加に伴い子どもたちの遊び場がなくなったという意見もあった。

最後に、無形の文化である「結」について尋ねた。伝統的な葺き替え方式である「結」は減少しており、白川郷における葺き替えのイベント化が進んでいると語った。「結」の継承は白川郷の歴史の一つとして注目を浴びている。ただ、現在では住民間での伝統というよりは、むしろ白川郷における1つのイベントとして残されているようにも感じられるという。

このような「結」のイベント化が指摘される理由はいくつかあると考えられる。第一に、葺き替えの技術を知っている後継者が不足することにより、住民のみでの葺き替えが難しくなっていることである。屋根の葺き替えには多くの人手が必要であり、人口減少や生活の変化に伴う影響を受けたものだと考えられる。第二に、合掌造り家屋の「質」が問われていることがある。これは白川郷の観光地化にも関連しているが、地域全体の景観を維持するため、合掌造り家屋で最も注目される茅葺屋根の質に対する意識が向上し、住民たちで葺き替えを行うよりも、業者に頼んで綺麗に仕上げることが無難な選択肢とされている事実があるためである。

3．観光客への聞き取り調査

白川郷を訪れる観光客に対して現地で聞き取り調査を実施した。二日間を通して、計 16 名（計6組）に聞き取りを実施した。回答者全員が宿泊での滞在であり、7 名が白川郷内での宿泊であった。白川郷に一度でも訪れたことのあるリピーターは 6 名であった。訪問の目的については 12 名が「観光」、4 名が「修学旅行」と回答した。

聞き取りの対象者にも含まれていたように、現地には多数の修学旅行生が見られた。（「修学旅行」と答えた 4 名が多数の学生と同行しているのを確認したため）白川郷が教育旅行の目的地として位置づけられる理由は、世界文化遺産という「日本らしさ」を表象する地域であること、里山での暮らしに代表される農村振興教育の舞台として適していることなどが考えられる。加えて、2021 年 8 月 17 日から 2022 年 3 月 31 日にかけて、白川村観光協会が各旅行者と連携して「白川村教育旅行促進事業」を実施していることも一因だと考えられる。また、聞き取り調査においてリピーターの 2 名から興味深い意見を得ることができた。2名は、以前訪れた時の白川郷の印象と現状の印象とを比較し、「15 年前に訪れた時より村が整備されている。良いことだが、観光地らしくなりすぎている。」「これ以上綺麗にしないほうがいい。」と過度な観光地化や景観の俗化を指摘していた。

Ⅵ．まとめ

上述のとおり、白川郷はその地理的・気候的条件に適応してきた歴史が感じられる「特徴的な文化的景観」と住民の「暮らし」が営まれる生活空間が魅力となり、現在では多くの人々の目的地となっている。ただ、同時に観光が生活空間のあり方を変容させたことも事実である。白川郷を訪れる人々は、合掌造りに代表される白川郷を求めるが、その歴史や文化の特徴、またそれらの変化について理解を得る機会が少ないことが指摘されている（合田・有本 2004）。住民への聞き取りからも同じような指摘があった。つまり、現在の白川郷の観光では、合掌家屋の形のみが注目を浴び、一定のまなざしの対象とされている。このように、観光によって生活空間の構成要素が序列化されていることが指摘できる。上記の聞き取り調査における景観の俗化への言及は、こうした「序列化」により生活空間としての白川郷が持つ個性や魅力が失われていくことへの懸念だと考えられる。

一方、現実的に見れば、白川郷を表象するその「特徴的な文化的景観」と住民の「暮らし」は今や観光と密接に関わっている。観光は、地域資源を活用した地場産業の振興を白川郷にもたらしたことも間違いない。ただ、観光による様々な影響が表出していたことや、現在の新型コロナウイルス感染症の影響で観光客数が大幅に減少したことにより、観光産業の脆弱性が認識されたという見解があった。このように、白川郷は世界文化遺産に登録されてから 25 年間以上経過した今

日でも多くの矛盾を抱えている。このことを踏まえて考えれば、今後は単なる経済的効果だけでなく、村の伝統の保全や生活を支えてきた景観を守ることに役立つような観光産業の適切な「規模」を検討する必要があると言える。すなわち、「最大」の観光客数を求めるより、白川村の自然や暮らしの景観に大きな負担が生じないような「最適」の客数を想定し、一定の数のコントロールと質の保証が望ましいと考えられる。無論、多様な当事者が携わる観光産業においては安易に実施できることでもないが、世界遺産に登録された地域だからこそ上記のような目標のもと「持続可能な観光」の実践に挑むべきではないだろうか。

参考文献

中日新聞（2021, 3 月 17 日）.「20 年、白川村の観光客数 19 年比 67%減」最終閲覧日 2022 年 4 月 1 日 , https://www.chunichi.co.jp/article/219332

合田昭二・有本信昭（2004）.『白川郷 世界遺産の持続的保全への道』ナカニシヤ出版 .

観光庁・UNWTO 駐日事務所（2020）.『日本版持続可能な観光ガイドライン』最終閲覧日 , 2022 年 4 月 1 日 , https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001350849.pdf

中村俊介（2019）.『世界遺産 : 理想と現実のはざまで』岩波新書 .

才津 祐美子（2006）.「世界遺産の保全と住民生活――「白川郷」を事例として」『環境社会学研究』*12*, 23-40. https://doi.org/10.24779/jpkankyo.12.0_23

白川村（n.d.a.）.『村の人口』最終閲覧日 2022 年 4 月 1 日 , https://www.vill.shirakawa.lg.jp/2008.htm

白川村（n.d.b.）『村の状況』最終閲覧日 2022 年 4 月 1 日 , https://www.vill.shirakawa.lg.jp/1400.htm

白川村（n.d.c.）.『白川村の観光統計』最終閲覧日 2022 年 4 月 1 日 , https://www.vill.shirakawa.lg.jp/1260.htm

内海美佳・黒田乃生（2009）.「白川村の『結い』と『屋根葺き替え』の変遷に関する研究」『日本造園学会　全国大会　研究発表論文集』. https://doi.org/10.14857/landscapeproc.2009.0.48.0

ICOMOS（2001/2002）. *Heritage at risk from tourism*. Retrieved April 1, 2022, from https://www.icomos.org/risk/2001/tourism.htm

受理日　2022 年 6 月 21 日